

NICUにおける母子相互作用を中心とした感染予防対策

I. 未熟児室(NICUを含む)における家族入室面会開始後 の院内感染症発生の動向

(分担研究: 新生児の感染症に関する研究)

中 嶋 健 之*

白 井 徳 満, 山 南 貞 夫, 奥 起 久 子

田 村 健 一, 梶 原 道 子

要 約

家族入室面会開始前の1年間および開始後の4年間を通じて、日常養護上、未熟児室(NICUを含む)内における入院5日以後の細菌感染症発生には、大きな変化はみられなかった。

面会開始3年後に、膿疱、細菌性皮膚炎が多かったが、散発的発生の増加であり、流行ではなく、院内感染対策の徹底により、家族入室面会の続行にもかかわらず、翌年には再び減少した。

見出し語: NICU, 家族入室面会, 院内感染症

研 究 方 法

昭和61年度厚生省心身障害研究で報告した昭和57年および59年の症例¹⁾に、その後の症例を追加して検討した。

対象に追加した小児は、昭和60年から昭和62までの3年間に、東京都立豊島病院未熟児室(新生児集中治療室=NICUを含む)に5日以上在室した未熟児および病的成熟児740例(男401例, 女339例)で、各年度における出生体重の分布および平均出生体重は図1に示した。

対象の感染症は、先天感染、または入院時すでに感染していた疾患が入院後発症したものを除外するために、入院5日以後に発症した細菌感染症(以下、単に感染症と略)とした。

調査は昭和61年度の報告¹⁾と同じ方法で、病歴

により後方視的に行い、剖検所見は考慮したが、人工換気中の重症感染症は、感染に関与する因子が複雑なので除外した。

結 果

検討した期間を通じて、対象の総数、男女比、出生体重の分布および平均出生体重、平均在胎期間に大きな変動はなかった。

入院5日以後の累計在室日数は、昭和60年がやや多かったが、平均在室日数には大きな差はなかった。

入院5日以後に感染症がみられた児数および感染症の(のべ)発生数は、昭和61年が多く、対象とした小児の例数に対する発生児数の割合、および累計在室日数に対する感染症発生数の割合ともに昭和61年が高かったが、他の年度では、入室

* 東京都立豊島病院小児科
(Dept. of Pediatrics, Tokyo Metropolitan Toshima Hospital)

面会開始の前後を通じて、大きな差はなかった(表1)。

感染症のうち、各年度で比較的多くみられた感染症の種類および発生数を図2に示した。

各年度を通じて、膿疱、細菌性皮膚炎、結膜炎などの表皮感染症が多く、絶対数だけでみると入室面会開始後増加した傾向がみえ、とくに昭和61年には多発したが、昭和62年には再び減少した。

これを累計在室日数に対する発生数の割合からみると、膿疱、細菌性皮膚炎は昭和61に0.5%と多く、結膜炎も昭和61年0.2%、昭和62年0.2%と、それ以前の年度に比してやや多かった。

膿疱、細菌性皮膚炎、結膜炎の起炎菌の多くは黄色ブドウ球菌であり、発生状況および抗生剤に対する感受性から考えると、昭和61年の多発も含めて、“流行”と考えられたものはなかった。

一方、同じ表皮感染症の真菌性皮膚炎および驚口瘡などは、家族入室面会開始後も不変で、むしろ減少傾向を示した。

考 察

著者らは、昭和61年度厚生省心身障害研究¹⁾で、東京都立豊島病院未熟児室では、家族の入室面会が始まった昭和58年の前後の年、すなわち、昭和57年と59年を比較して、日常養護上、室内の感染症の発生に、推計学的に有意差がなかったことを報告した。

今回は、その後の未熟児室内での感染症発生動向を調査し、前回の症例に追加して検討したが、今回は昭和57年から62年までの6年間で、比較的長期間にわたるものであり、この間には未熟児室内における医療手段や看護婦などの医療従事者に、少なからぬ変化があった。

従って、前回の短期間における検討で行った推計学的検討は、今回は行わなかった。

結果として、家族の入室面会開始前後を通じて、日常養護上、室内感染症の発生に増加傾向は一般的にはみられなかったが、膿疱、細菌性皮膚炎が、

昭和61年に多くみられ、結膜炎も昭和61年および62年はそれ以前に比して多かった。

これらの増加は、散発的発生が多かったためであり、起炎菌の抗生剤に対する感受性などから考えても、特定の人物あるいは出来事が原因となった“流行”とは考えられず、家族の入室面会に関係があるとは考えられなかった。

しかし、このような傾向が多発ないし持続する場合には、院内感染予防対策のどこかに破綻が生じていることを意味するものであり、家族の入室面会も含めて、院内感染予防対策の再検討ないし徹底が必要であり、これをそのまま放置すると、突如の大流行をまねく可能性がある。

著者らは、手洗いなどの院内感染予防対策を徹底し、家族の入室面会は続けたが、昭和62年にはこれらの表皮感染症は減少傾向を示した。

未熟児室のみならず、すべての病棟において、院内感染症発生の増減に常に注目し、各年度ごとに今回行ったような調査を実施することは、院内感染予防対策の面で重要なことと考えられた。

家族入室面会によって起こる感染症の予防は、総括的な院内感染予防対策のなかで考えられるべきものであり、そのためには多くの物的、人的負担が要求される。

そして、この負担を甘受する意欲のある未熟児室ないしNICUのみが家族入室面会を許すべきであり、風潮だけで安易に家族の入室面会を許すことは、大きな危険を伴うと考える。

文 献

- 1) 中嶋健之、白井徳満、山南貞夫、奥起久子、田村健一ら：NICUにおける母子相互作用を中心とした感染予防対策、厚生省心身障害研究新生児管理班、新生児管理における諸問題の総合的研究・昭和61年度研究報告書、289頁、および小児科臨床投稿中(未熟児室(NICUを含む)への家族入室面会開始前後の年における細菌感染症発生動向の調査)

対象(5日以上在室児)の比較 (出生体重)

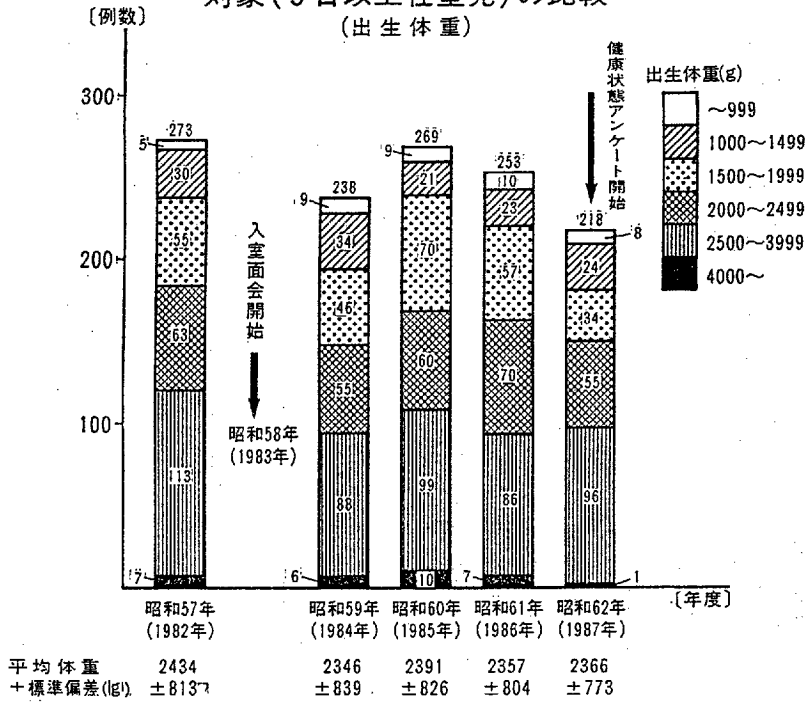


図1.

表1.

5日以後の在室児と感染症発生についての年度別比較

	例数		在胎期間 (週)	出生体重 (g)	5日以後在室日数		感染症			
	男	女			累計	1例平均	発生日数	発生日数	発生日数 (%)	発生日数 (%)
昭和57年 (1982年)	148	125	37±4	2434 ±813	7435	27	50	53	18.3	0.71
昭和58年入室面会開始										
昭和59年 (1984年)	145	93	36±4	2346 ±839	7450	31	43	47	18.0	0.63
昭和60年 (1985年)	154	115	36±5	2391 ±826	8151	30	50	60	18.6	0.74
昭和61年 (1986年)	128	125	36±5	2357 ±804	7709	30	57	79	22.5	1.02
健康状態アンケート開始										
昭和62年 (1987年)	119	99	36±6	2360 ±773	7092	34	45	54	20.6	0.76

入院5日以後の感染症発生数

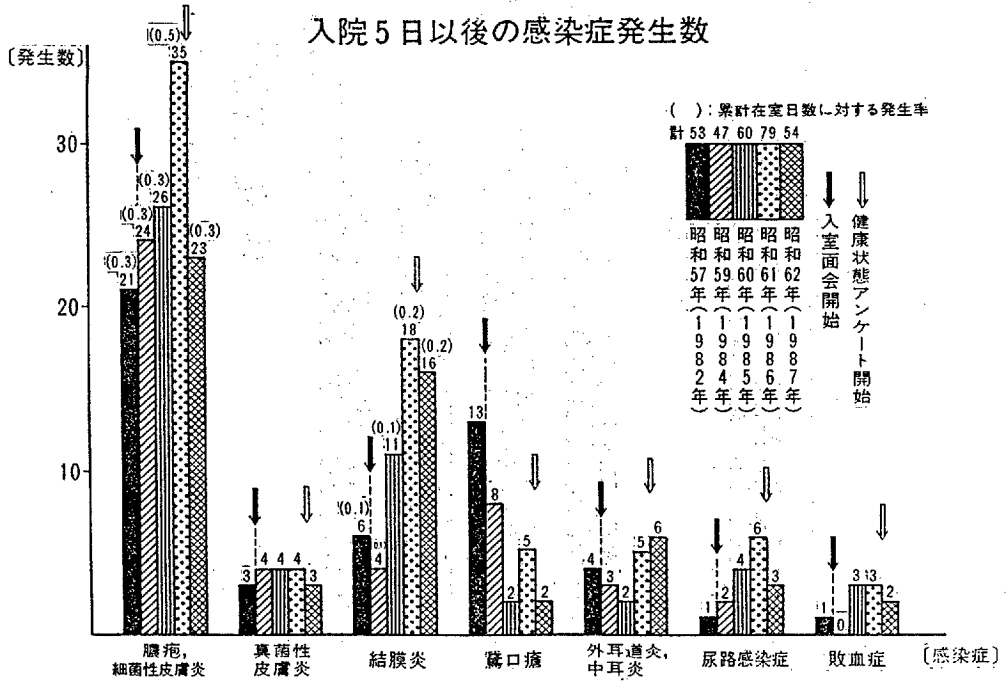


図 2.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

家族入室面会開始前の1年間および開始後の4年間を通じて、日常養護上'未熟児室(NICUを含む)内における入院5日以後の細菌感染症発生には、大きな変化はみられなかった。面会開始3年後に、膿疱、細菌性皮膚炎が多かったが、散発的発生の増加であり、流行ではなく、院内感染対策の徹底により、家族入室面会の続行にもかかわらず、翌年には再び減少した。